

1. 美術科研究主題について

(1) これまでの本校美術科の研究

これまで本校美術科では、表現や鑑賞の課題を解決するための基礎的な力の育成について考えてきた。「どのような工夫をすればもっとよくなるか」、「この作品のよさは何か」など、生徒が主体的に考えながら課題に向かう学習の積み重ねにより、「自ら問う」姿勢を育てることに取り組んだ。

言語活動の充実については、発想や構想を練るときに言葉で考えを整理することや、作品などについて他者と話し合うことは、表現と鑑賞の能力を伸ばすうえで有効な手だてであると考え、計画的に授業に取り入れてきた。とくに、発想や構想の力を発揮させる学習活動で、グループで話し合う、批判し合う、発表し合うなどの活動を行い、他者との交流の中でイメージを広げ、豊かに発想したり、深く作品を味わったりすることができた。

また、美術科におけるビジュアル・コミュニケーション能力の育成と、生活に役立つ美術を実感させるために、視覚的な言語活動も扱ってきた。

(2) 課題における主題、言語活動について

表現力を培う美術の学習は、まず課題に向き合い、それを捉え、さらに自ら主題を生み出すことが必須である。そこで昨年度（平成26年度）は、自ら主題を生み出すための学習活動に焦点を当てた。しかし、主題さえ生み出せば何でもよいというわけではない。学習者の発達段階やその実態に合う主題のあり方について考える必要がある。では、学習の過程の中でいつ主題を生み出すべきか。課題の内容にもよるが、その順序にきまりはない。例えば、素材に触れたりアイデアスケッチをしたりするうちに、主題を思いつくこともあるであろう。偶然から見つけてもよいのか、主題を先に決めておいた方がよいのか、それは、授業のねらいが何かによる。授業者は、何をどのように生徒が学んでいくのかを明確にし、この学習でどんな力をつけさせたいか、意図的な仕組みをもって指導することが大切である。

昨年度提案した授業では、学園祭の思い出にまつわる自分の気持ちを表現するために、さまざまに言語化しながら主題を考えた。しかし、美術では言葉にならない「気持ち」を表したい場面も考えられる。そのような場合、色や形も言語であるといつてよいであろう。気持ちを文字にした途端、そのときの気持ちとは変わってしまう（言葉に引っ張られてしまう）こともあろう。その危険性にも注意する必要がある。言葉に置き換えたことがよくなったのか、よくなかったのか、言葉にできないものを深く考えることができるのかなど、今後も考えていく必要がある。

(3) 生徒の実態

本校の生徒は、学習活動に対して概して意欲が高く、主体的に取り組もうとする。また、知識も豊富で、知識や経験を生かしながら学習に取り組もうとする生徒が多い。美術科の学習においても同様に、真面目に熱心に取り組む。表現の学習では、より良いものを目指して最後まで粘り強く描いたりつくったりする。鑑賞では、自分の意見を発言し、他者の意見に耳を傾け、自分の言葉で記述できている。また、日常的に美術に触れる機会があり、山梨県立美術館など県内外の美術館を訪れた経験のある生徒も非常に多い。表現の学習では、よりよいものを目指して最後まで粘り強く描いたりつくったりする。鑑賞では、自分の意見を発言し、自分の言葉で記述できている。課題の内容を理解し、それに合わせた作品を制作したり記述したりすることは簡単にできてしまう。このような生徒に対して、自分が考えたことや表現したことを批判的に見直し、よりよい考えや表現に挑戦しようとする態度を付けさせたい。さらに、知識や技能を活用して課題を解決するための思考力・判断力・表現力等や、主体的に学習に取り組む態度をいっそう伸ばしたいと考えている。

(4) 現代社会における課題

美術が教科として存在する意味は、生徒に創造力を付けさせることと、これまでに受けつがれてきた人類の文化の価値を理解させることにある。表現と鑑賞の学習を通して普遍的価値を学び、新しい時代の価値を生み出すような創造性のある人間を育てている。また、美術科は造形的な活動（表現や鑑賞）により他者とかかわり、他者への理解と価値の共有、コミュニケーション能力など、これからの時代に必要な能力を身に付けられる教科でもある。

自分の価値観を大切にしながらも他者の価値観を尊重する態度や、自分の価値観の押しつけや他者の否定をなくし他者理解によるより良い人間関係をつくろうとする態度は、現代社会を生きていく上で大切な資質である。これらの力を育てる役割の一つを、美術は担っていると言える。

国立教育政策研究所「平成24年度プロジェクト調査報告書 教育課程の編成に関する基礎的研究 報告書5」に、21世紀を生き抜く力として「21世紀型能力」が示された。「21世紀型能力」とは、「基礎力」、「思考力」、「実践力」の三つの層で構成されている。

美術科の学習（鑑賞）では、生徒はまず鑑賞の対象となる作品などの色や形、描かれている内容などのイメージを捉え、見たこと考えたことを頭の中でつなぎ合わせる。そこから作品のよさを感じ、作者の意図を考え感想をもつのだが、さらに思考力を働かせて、自分の意見を述べたり他者の意見を聞きながら話し合ったりする実践的な学習を通して基礎力と思考力はさらに育つ。美術の学習は、一つの正解を目指すものではなく、学習の主体である「私」が自分なりの見方感じ方で作品などを味わい、その価値をつくり出すことであるので、主体的積極的な生き方を目指す態度が、生徒一人一人に育つことも期待できる。

（5）全体研究主題から（本校美術科における「深く考える」とは）

美術の学習は、感じ取ったことや考えたこと、心の中に描いたことや願いから主題を生み出し、それを基に発想・構想して創造的に表現していくことと、美術作品や自然の造形のよさや美しさについて自分の価値意識をもって見つめたり、他者と批評し話し合ったりなどして、そのよさや美しさを感じ取り味わうことである。生徒は、身に付けた知識や技能を生かし、新しい表現方法を試したり見方を変えたりしながら、表現と鑑賞の学習活動を行っている。

では、表現と鑑賞の学習からなる美術科における「考える」とは何であろうか。

表現の主題を生み出すときや鑑賞の対象となる作品などに出会ったとき、生徒の心の中に表現への欲求や感動が芽生える。その動機を基に、課題を追究しようとする主体的に態度が、「考える」生徒の姿であろう。表現の学習では、生徒は主題を生み出すときに考えたことについて、発想し構想を練るときや創意工夫しながら表現を試みる。自分の感覚を十分に働かせて、形や色彩、材料、光などの性質やそれらから受ける感情などを理解し、基礎的な知識や技能を活用しながら学習活動を行うことを「深く考える」としたい。「深く考える」ことにより、探究的により良い作品を描いたりつくったりする表現の能力を伸ばすことになる。鑑賞の学習では、まず作品と出会ったときの感動がなければならない。そこから、「なぜこの作品は心を打つのだろうか」といった作品の本質に迫れるような「考える」活動が始まる。鑑賞の学習は、美術作品などに対して自分の価値意識をもって見つめたり、他者と批評し話し合ったりなどして、そのよさや美しさを感じ取り味わうことである。「深く考える」鑑賞は、様々な視点から作品などを捉え直したり、これまでに身に付けてきた知識を使ったり、疑問点について自分から調べたりしながら作品などを見る学習活動である。作品などを理解し深く味わいながらも批判的に見ることを通して、鑑賞の能力がいつそう高まるであろう。

美術科の学習内容は、身に付けさせたい資質や能力が基になっている。そのため、題材のねらいに則して生徒一人一人に課題があり、正解がある。そこでは、生徒の自ら気づきを中心に授業を進め、そこから生徒それぞれが解決すべき問いに対して、思考し判断し、自分なりの答を見いだす。さらに、そこから新たな問いが生まれ、さらに追究せざるを得ない欲求が生じる。このように、次々と現れる問い、疑問、課題に対してよりよい解決や答を繰り返し求めようとする学習が、美術科における「深く考える」学習であろう。そして、この学習体験が、生涯にわたって美術を愛好する態度の基礎となるはずである。

「深く考える」授業を通して、美術の資質や能力を高め、さらに、この経験を積み重ねて継続的に思考しながらよりよいものを目指す態度を身に付けさせたい。

（6）「深く考える」ための手立て

美術科は多様な価値を求める教科であり、学習内容が限定的ではないので、目指す生徒の姿や身に付けさせたい力が抽象的で曖昧になってしまう危険性がある。そこで、次のような手立てを講じ、授業づくりを考えていきたい。

本校では、「深く考える」授業を目指すにあたり、「視点を変える」ことを授業に取り入れ、自分自身の表現や理解の状態を吟味する経験を積ませるようとしている。「視点を変える」とは、本校研究全体総論によれば、自分の見方や考え方を客観的に捉えることと、他の見方や考え方などと比較してみたり、異なる立場から見たり考えたりして、自分の見方や考え方を深め広げることである。

美術科の学習において「視点を変える」とは、「自分が本当に表現したいこと」や「その作品の本当の価値」など

について冷静に見つめ直し、思索し追究することである。

実際の学習の場面では、具体的には次のような活動が「視点を変える」ことになる。

表現の学習においては、主題を生み出す段階で、発想したことをいったん言葉に表したり、他者と話し合ったり、いろいろ試したりすることで、表したい内容や伝えたい内容が自分の中でより明確になる。構想を練る段階では、形や色彩、材料などの特質や効果を理解しながら描いたりつくったりすることで、よりよい作品を目指すことができる。さらに、「この色や形、材料、表し方で、自分が伝えたいことが表せているだろうか」と自己評価し自問する態度も「視点を変える」ことになる。

鑑賞の授業では、新たな視点や価値などに気付き、見方考え方を広げ深めるために、他者の意見を聞いたり話し合ったり、知識を得たりする学習活動が、「視点を変える」活動である。自分では気付かなかった作品のよさについて、他者の考えに触れ、話し合うことで多様な価値に気付くことができると同時に、自分とは違う他者への理解も期待できる。

私たちは「好きだ」「おもしろい」と感じた作品については、肯定的な感想を述べるができる。そこであえて、批判的に見ることを試みる。作品に対して厳しいまなざしを向けることで、新たな発見ができるであろう。反対に、好みではない作品については、作品のよさを見つけ出すような態度で見ることにより、「好きではないが、価値があることは分かる」ということに気付くであろう。このように、鑑賞の対象について肯定的に見ることと批判的に見ることを同時に行うなど観点を変えて見ることも「視点を変える」こととする。この2つの「視点を変える」活動により、自分の考えが深まったり発展したりすることができると思う。

これらの学習の手立ては、形、色彩、材料などの効果を理解しながら、全体のイメージをとらえたり自分の表したいことが表現されているか常に振り返ったりするという〔共通事項〕の視点にも通じる。

また、本校の校内研究会では、学習の意欲や動機付けについて「課題や問題を目の前にしたとき、生徒の心の中には、『誰かに伝えたい』『それを解決したい』といった気持ちが自然と湧き上がり、それは、学習活動を展開する原動力となるものである。それらを引き出すような課題設定・場面設定、学習過程や学習活動の工夫が重要となる」としている。美術科においても、学習意欲の喚起や動機付けのためには、生徒がその授業で学ぶ意義を感じ、身に付ける力が生徒と指導者で共有でき、なおかつ生徒自身の心の内から課題に向き合うことができるような題材を設定する必要があると考える。

これらの手立てを取り入れながら、題材や評価規準を設定し、授業づくりを考えていきたい。

(7) 本年度の研究主題

美術の基礎的な力とは、4観点に示されているとおり関心や意欲を基に発想・構想し、創造的な技能を働かせて表現する能力と、造形的な美しさや作者の心情・意図、表現の工夫を味わう鑑賞の能力である。基礎的・基本的な知識・技能と、思考力・判断力・表現力等を含むこれらの美術の基礎的な能力を身に付けさせるために、本校美術科では、これまでの取組を継続して題材と指導の工夫をすることとした。

本年度(平成27年度)は、美術科で育む力のうち、鑑賞の能力に焦点を当てる。鑑賞とは「単に知識や作品の定まった価値を学ぶだけの学習ではなく、知識なども活用しながら、様々な視点で思いを巡らせ、自分の中に新しい価値をつくりだす学習(中学校学習指導要領解説 美術編)」である。自分の見方や感じ方を基に、思いや考えを話し合う活動や知識の活用などを行い、主体的に作品を見ることを通して鑑賞の力を伸ばしたい。鑑賞の能力を高めることは、表現の学習にも生かされるはずである。

2. 研究の目的

生徒が主体的に課題に取り組み、身に付けた知識や技能を活用し、「深く考え」て表現と鑑賞の学習を行うことを通して、自分の表現したいこと、考えたことや理解の状況等を、他者や社会との関係の中で客観的に見つめる態度養い、表現と鑑賞の美術の基礎的な能力をいっそう育てる。

3. 研究の内容

- ① 生徒が「思いや意図」をもち、主体的に課題に取り組めるような題材を設定する。
 - ・主体的に意欲をもって表現や鑑賞の学習ができるような題材や授業の開発
- ② 身に付けた知識や技能を活用し、美術の学力を伸ばす表現と鑑賞の「深く考える」授業計画を立てる。
 - ・ねらいや学習内容などが整理できる、言語活動やワークシートの工夫
 - ・「見通しをもつ」ことと「振り返る」ことの中で、より主体的・計画的に学習ができるような授業づくり
- ③ 〔共通事項〕の適切な位置づけによる題材設定や授業の展開を工夫する。

4. 3か年の研究の見通し

昨年度（平成26年度）は、「発想・構想の能力を伸ばす」ことにポイントを置き、題材開発や授業の展開について取り組んだ。発想を引き出すための手だてや、より「深く考え」ながら試行錯誤できるような題材を用意した。また、美術科における「深く考える」生徒像について、具体的に示せるようにしたい。

2年目となる本年度（平成27年度）は、鑑賞の学習に比重を置く。深く考える授業を通して、創造的な生き方を支える基礎力および思考力を育てたい。

3年目は、美術の基礎的な能力をいっそう高め、自信をもたせる中で、新たな価値をつくりだす創造的な思考力、判断力、表現力をもった創造性豊かな生徒の育成を目指すような授業実践を行うとともに、研究を検証し3か年の成果をまとめる。

5. 実践例

（1）題材名

1学年「自分の見方で～ゴッホの《星月夜》の鑑賞」（全1時間） B鑑賞 ，〔共通事項〕

（2）題材について

① 生徒の実態

生徒はこれまでに鑑賞の学習で、教科書（日本文教出版）に掲載されている《夜のカフェテラス》（ゴッホ）、《鳥獣花木図屏風》（若冲）や、《叫び》（ムンク）、《森の掟》（岡本太郎）などについて、対話による鑑賞の方法で学習した。また、山梨県立美術館のアートカード「みるえ」を用いて、気に入りの作品を選び、そこから感じたことを基に題名を想像し、解説文を自分で考えて友達と交流するといった学習活動も行った。

このような生徒に対して、すでに知っている画家や作品について、改めて詳しく見たり考えたりすることを通して、作品に対する新たな価値に気付くことができるような、主体的で探究的な鑑賞の態度を身に付けさせたいと考え、この題材を設定した。

② 授業について

「鑑賞は、単に知識や作品の定まった価値を学ぶだけの学習ではなく、知識なども活用しながら、様々な視点で思いを巡らせ、自分の中に新しい価値をつくりだす学習である。」（「中学校学習指導要領解説 美術編」平成20年文部科学省 下線は本校美術科）とあるとおり、鑑賞の授業では、作品などと出会った「私」の見方や感じ方を大切にしながらも、学習を通して見方感じ方を広げて、より深く作品を味わう力を身に付けるようにしたい。

そこで、この授業では対象となる作品（およそ実物大にカラー印刷したもの）をよく見て、その作品から感じたことや気付いたことを起点に鑑賞を進め、他者の意見を聞いたり話し合ったりしながら、知識を活用し、視点を変えて作品に対する見方や感じ方を広げ、深く作品を味わう学習活動を行う。

この活動により、作品を味わっている自分を発見すると同時に、他者を理解する態度も身に付くと思える。

③ 《星月夜》について

《星月夜》（ニューヨーク近代美術館蔵）は、ゴッホの死の前年（1889年）に描かれた作品である。そのとき入所していたサン・レミの療養所から見た風景が基になっている。

画面左に大きく糸杉が描かれているが、この時期のゴッホにとって、糸杉は最も大切なモチーフである。それは、彼自身の孤独な心の象徴であると一般的には読み解かれている。また、月や星が渦巻いているように描かれているなど、《夜のカフェテラス》などの夜の風景を描いた他の作品と比べても、現実的ではない表現となっている。色彩については、ひまわりを描いた作品では黄色が印象的だが、夜の情景では青を多用している。厚塗りで素早い筆触にも関わらず、絵から静けさが感じられるのは、その色彩に依るところが大きい。

有明の月が掛かっていて明けの明星が輝いていることから、明け方の時刻であることが分かるが、静かな夜空を見上げた、ゴッホの気持ちを想像しながら鑑賞することもできる。

(3) 本校全体研究と関わって

①美術科における「深く考える」について

美術の学習は、感じ取ったことや考えたこと、心の中に描いたことや願いから主題を生み出し、それを基に発想・構想して創造的に表現していくことと、美術作品や自然の造形のよさや美しさについて自分なりの価値をつくりだすことである。

鑑賞の学習活動においては、作品に出会ったときの自分の感じ方、考えたことを大切にしながらも、他者と話し合ったりするなどの交流しながら見方感じ方を深め、新しい価値に気付くことである。「もっと深く（作品などを）感じ味わうこと」について継続的に思考しながら、よりよい見方や感じ方を目指す姿そのものが、「深く考える」生徒の姿であると考えられる。

②本授業における「視点を変える」について

「深く考える」授業をつくるために、本校研究では、「視点を変える」活動を取り入れることとしたが、「視点を変える」活動については、この授業では次のことを行う。

鑑賞の対象について、自分の見方や感じ方を広げるために、自分の考えを持ちながらも他者の意見を聞いたり、話し合ったりする。自分だけでは気付かなかった作品のよさについて、他者の考えにふれ、話し合うことで多様な価値に気付くことができる。この活動により、自分の考えが深まったり発展したりすることができると同時に、他者を理解する態度も身に付くと思える。

(4) 学習指導要領上の位置づけ

B鑑賞

(1) 美術作品などのよさや美しさを感じ取り味わう活動を通して、鑑賞に関する次の事項を指導する。

ア 造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図と表現の工夫、美と機能性の調和、生活における美術の働きなどを感じ取り、作品などに対する思いや考えを説明し合うなどして、対象の見方や感じ方を広げること。

イ 身近な地域や日本及び諸外国の美術の文化遺産などを鑑賞し、そのよさや美しさなどを感じ取り、美術文化に対する関心を高めること。

[共通事項]

(1) 「A表現」及び「B鑑賞」の指導を通して、次の事項を指導する。

ア 形や色彩、材料、光などの性質や、それらがもたらす感情を理解すること

イ 形や色彩の特徴などを基に、対象のイメージをとらえること。

(5) 題材の目標及び題材の評価規準

①題材の目標

対象について、自分が感じたことを大切にしながらも、他者の意見を聞いたり視点を変えたりしながら鑑賞し、思考力を働かせて作品のよさを感じ取り見方を広げる。

②題材の評価規準

美術への関心・意欲・態度	鑑賞の能力
造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図と表現の工夫などの関心をもち、主体的に感じ取ろうとしている。	感性や想像力を働かせて、造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図と表現の工夫などを感じ取り見方を広げ、自分の思いをもって味わっている。

(6) 本時の授業

①対象とする作品

《星月夜》(1889 ニューヨーク近代美術館蔵)

《夜のカフェテラス》(1888 クレラー・ミュラー美術館蔵) …参考

《糸杉と星の見える道》(1890 クレラー・ミュラー美術館蔵) …比べて見るための参考

②ねらい

・形や色彩などの特徴や印象などから対象のイメージをとらえ、そのよさや美しさ、作者の心情や意図と創造的な表現の工夫を感じ取り、自分の価値意識をもって味わう。

・作品をよく見ることを起点に、作品のよさを感じ味わう活動を行い、さらに鑑賞の能力を働かせて見方・感じ方を広げたり深めたりする。

③本時の展開

時間	○学習活動 ・活動の内容、指導のポイント及び留意点	題材の評価規準(評価方法) 関心・意欲・態度、鑑賞の能力		☆「深く考える」ための手立て
導入 7分	○本時の学習内容を確認し、見通しをもつ。 ・作品をよく見て、そこから気付いたこと考えたことをもとに、作品の特徴に気付くこと ・美術作品の見方について考えること ・他者の意見を聞いたり、視点を変えたりしながら、より深く作品の価値に気付くこと ○ワークシートを配付する。 ○本時のねらいを知る。 ・見ることと考えることの両方を働かせて、作品を味わう力を身につける。 ・友達の考えを聞いたり話し合ったりしながら、見方感じ方を広げる。			☆「4つの力」のカードを掲示す。(この授業では「鑑賞の力」が中心となる)。
展開 33分	○黒板に掲示した作品《星月夜》(およそ実物大に印刷)を全員で見て、作品名、作者名、知っていることなどを確認する。 ・題名の意味について(星が明るい夜) ・これまで授業で鑑賞した《夜のカフェテラス》について ○最初に感じたことを、ワークシートに記入し、発表する ・最初の印象を一言でまとめる ・互いに発表する *予想される生徒のこたえ 「幻想的」「空の渦のようなものが不思議」 「画面に大きく描かれた黒いものは、何だろう」 「明るい星は何だろう」 「月の形がおかしい」	進んで話し合いに参加しているか (観察)	自分の考えを大切に記述や発言をしているか 相手の話を聞いているか (観察、ワークシート)	形や色彩、描かれている内容、表現の特徴などから、感じたことを記述するようになる(鑑) ☆細部を観察するとともに、全体的なイメージをもつようになる。[共] ☆形、色などに着目し、そこから受ける感情について考える。[共]

場合によって知識を与える
「描かれている木は糸杉であり、ゴッホの絵の中にはたびたび登場する」

□ 確認タイム (鑑賞する作品について)

作者 ファン・ゴッホ 題名 『 星月夜 』

□ シンキングタイム

①まず、一言!

全体が青と黄色と黒でまわっている。
空が不思議な動きをしている。

みんなの一言・・・(「なるほど」と思ったものがあればメモしておこう)

・街が月に照らされている。

・げん想的

○発表の中から、描かれているものについて確認する。

○各グループ(4人×10グループ)に、作品(およそ実物大に印刷されたもの)を配付する。

○よく見て、「なぜ?」と感じたことなどを、ワークシートに記入する。

・その中から、疑問に思ったこと、考えたいことを挙げる。

*予想される生徒の疑問

「なぜ、糸杉を大きく描いたのか」

「なぜ、空がゆがんでいるのか」

「なぜ、星を大きく描いたのか」

☆自分と他者との見方や感じ方の同じ点や違う点に気付く。

②よく見て発見! 気付いたことから、「なぜ? なに?」を探そう。

なぜ星が大きく描かれているのか?



なぜ空がゆがんでいるのか?

なぜ線を描くような筆使いで絵を描いているのか?

・窓の所が誰か? ・時間帯? ・夜中過ぎ
・波? ・空と街の描き方が違う?

糸杉 ↓ 木の根に①

<p>○最初のグループトーク</p> <ul style="list-style-type: none"> ・疑問（「なぜ？」）を基に話し合う。 <p>○全体トーク</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループでの話し合いの内容を紹介する。 *予想される話し合いの内容 「糸杉は、街のシンボル」 「糸杉は、ゴッホの強い気持ち」 「空は、ゴッホが悲しい気持ちで涙でゆがんで見えた」 「星の輝きが印象に残った」 →科学的な視点も与える <p>糸杉・・・ゴッホは他の絵にも描いた →《糸杉と星の見える道》を場合によって提示</p> <p>有明月・・・夜中過ぎに出る 明るい星・・・明けの明星？ 夕方と明け方にしか見えない</p> <p>○全体の話し合いを受けて、さらに疑問を生み出す。</p> <ul style="list-style-type: none"> *疑問の例 「ゴッホは糸杉をどのように描いているのか」 「絵のどこから、悲しさを感じるのか」 「なぜ、星の輝きをそのように描いたのか」 <p>○それらの疑問（新たな「なぜ？」）について自分の考えをワークシートに記入する。</p>	<div data-bbox="938 459 1337 667" style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> <p>同じ作者の他の作品の提示。 比べることで、新たな気づきを得る。</p> </div> <div data-bbox="912 763 1327 949" style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> <p>知識として・・・ 「月の形や明星から、明け方らしい」</p> </div>
---	--

④「なぜ？ なに？」に対する、私の見方とみんなの見方

私の見方	みんなの見方
<ul style="list-style-type: none"> ・夜がうす^くを巻いているのは、時間の流れを表すためだ^と思う。 ・空を線のように描いているのは、景色が変わっていく流れを表すためだ^と思う。 ・糸杉を線のように描いているのは、糸杉の成長を表すためだ^と思う。 ・街が静かな時間も景色は変わっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・風の流水。 ・線で流水を表している。 ・うす^くが光をまきこんでいる。 ・糸杉を線で描いたのは、風で揺れているから。 ・山の上は月の明かり(光) ・月の光と糸杉の光を比較 ・空には神様がいる。 ・波が来ている。 ・夜の暗さと明るさを混ぜ合わせている。

夜空の無限の広さや、月の異常な大きさや、糸杉の高さなどから世界はどこまでも高くなることはい
 けるし、どこまでも大きくなることも可能で、世界の可能性を描いてお思った。
 そして、月や木などの自然と共に生きていくことを描いていると思った。

⑤???

夜の暗さと明るさを混ぜあわせている。

私は、街にいる人たちが活動している間だけでなく、休んでいる
 間も、空や植物などが活動し、景色を変えているということも表現
 したかったのではないのかなと思いました。

やはり、空や糸杉を線で描いたのは、時間の流れを表すためだと思
 いました。

まとめ 10分	<p>○授業を通して、自分の考えがどのように変わ り、深まり、広がったか振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・数人の生徒に感想を聞き、学習を振り返る。 ・ワークシートを提出する。 	(観察)	(観察, ワー クシート)	☆他者の発想や表 現の意図を感じ取 れるように、ワーク シートに記録する。
------------	---	------	------------------	--

美術科ワークシート

自分の見方で (鑑賞)

1年2組

この学習のめあて

- ・見ることと考えることの両方を働かせて、作品を深く味わおう。
- ・自分の見方を大切にしながら、友達のを聞いて話し合ったりして、見方感じ方を広げよう。

□ 理解タイム (鑑賞する作品について)

作者 フィンセント・ファン・ゴッホ 題名 『星月夜』

□ シンキングタイム

①まず、一言!

夜空がとてきれいだ!!!

みんなの一言・・・(「なるほど」と思ったものがあればメモしておこう)

版に描かれた街をモナリに再現。暗い木と明るい月の対比。

②よく見て発見! 気付いたことから、「なぜ? なに?」を探そう。

津波におそ
われて、家が
どたどた
倒れている
んだ。

近くか見ると
雑色なんだ!
(何か異変が?)

街中の明かりが
(意)で見える(出てる)
感じ。

夜空の暗さと
明るさを混ぜ
あわせている。

短く線が
かかっている。
星が目玉焼き
(大層?)

おじ
さん

なぜ...

神の
存在?

神に
願う?

宗教に
神がいて
いる
信じて
いる
神に
おまかせ
しよう

星=神
時
神が
あつて
いる

ゴッホは
宇宙と
交信する
神を
探している?

ゴッホは
宇宙の中で不思議な
感覚を持っていて、
実際の夜の風景を見
ると、神の怒りや人
々の不安感が
表情から目に
浮かぶ。美しい夜の
星と月に表現し
ようだった!

ゴッホは
宇宙の中で不思議な
感覚を持っていて、
人々を想像して、内
心でおそろわして
いたのとは
ないから
人々の苦しみを
描いたゴッホの
性格が表れている
のでは!?
あえておじさん
の顔を面白く描
いたのは
それか
それか
そう考えると
とても
意味だ!

私の見方

糸杉 → 難をのがれる?

空の海... 天の川にさする街
の明かりが... この時代は
よく見えているはず。(月も3日
前から向井屋が目撃!!!)

空(難)は細く星はかけがえなし
細くなるから、ほつれた
街は糸とつながった
おじさん → 悲しい心 (感情) 表現
した

神の存在? 神は存在する
神がいて
いる

星の誕生

人類滅亡

みんなの見方

→ 速く街の光
死がとまるとは?

糸杉が暗の使い分けが好き

うが時間の流れ

波は風の流れる

波 おじさんが不安

うがの細さから 月と星の
来歴

風景+空想

人がリ格

(7) 育てたい「4つの力」(本時は2つの力)

その授業や学習の場面で、どのような力を発揮したらよいのかを生徒に分かりやすく示す。

観点	美術への関心・意欲・態度	鑑賞の能力
発揮する力	造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図と表現の工夫などの関心を持ち、自分の気持や意志を大切にしながら主体的に取り組み感じ取ること。	造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図と表現の工夫などを感じ取り、作品などに対する思いや考えを説明し合うなどして、対象の見方や感じ方を広げること。
生徒に示す言葉	自分の見方で見つめよう	感じとり味わおう

6. 研究のまとめ

(1) 美術科における「深く考える」授業の振り返り(「深く考える」生徒の姿が見られたか)

鑑賞は、自分の価値意識をもってその作品のよさや美しさなどを感じ取り味わう学習である。今年度は鑑賞の学習について提案授業を行ったが、本校美術科では、作品に対して自分なりの問いをもち、さまざまな自分なりの答を求めるような探究的な学習を主体的な学習にすることを目指した。これは、作品に向き合い様々に思考している「私」を発見する活動でもあるといえる。提案授業では、生徒はゴッホの「星月夜」について見て味わい、考え、考えている自分を発見できたと思える。

本校では、学習課題に対する「自分なりの結論」で満足せず、それを吟味し改善したり発展させたりする生徒の育成を目指し、そのための「深く考える」授業について全教科で取り組んでいる。「自分なりの結論」に満足している生徒を揺さぶるための手立てとして、「視点を変える」活動を取り入れている。作品に対する視点を変えること(他者の意見や知識)で見方や感じ方が深まると仮定して、この授業では、次のような手だてを講じた。

授業の当初は、描かれている内容や色の美しさ、筆遣いの力強さ、不思議な雰囲気などを素直に感じ取っていた。鑑賞を進めるうちに、何を描いたものか、何が描かれているのか、という疑問が生まれ、それについて、あれこれ想像した。

次に、疑問について考えるために、他者との交流(4人グループでの話し合いや学級全体での意見発表)や、知識の活用(描かれている糸杉の意味や、描かれた場面の時刻)、他の作品との比較などを行った。そこから見方が広がっていき、より深く作品に迫れたように思う。

ある生徒は、渦巻くような夜空の描写について、「涙で滲んでいる」、「空にある神の目玉」など、自由な感想を述べていた。また、夜の不安感について、「不安を感じているのは私だけでない」ということに気づき、心理的な安心感や自分の存在感を確認できた生徒もいた。そのような自由な発想や共感的な見方は、作品に対する定まった価値を学ぶような授業からはなかなか引き出せないであろう。

(2) 「深く考える」授業についての考察(生徒の姿から見えてきたもの)

他者との交流(グループでの話し合い活動)により、自分の考えが広がった生徒もいた一方、グループの意見に引っぱられて、自分の考えがなくなってしまった生徒もいたことは課題点である。「視点を変える」ためのグループ活動を行う場合は、まずは自分の目と心でしっかりと作品に向き合い、自分の考えをもっていることが大切である。そのためには、考える時間と、話し合う時間の枠組みをしっかりと分ける必要がある。また、心の内面(自分の気持ち)を語るときには、どんな意見も大切にされるという教室の雰囲気やルールが整っていることが大切であることが分かった。

ところで、実際に美術館などで作品を鑑賞するとき、私たちはどのように作品を見ているのだろうか。まず作品の全体を眺め、次にキャプションや解説文などを読み、その作品を理解したことにするだろう。美術の授業においても、同じようなことが行われる場合が多い。

例えば、ゴッホの作品については、そのときのゴッホの精神的な状態を知りながら見たり、鑑賞を通してゴッホの内面に迫るような見方をしたりなど、彼の人生の物語に寄り添いながら鑑賞される場合が多い。しかし、鑑賞の学習は、「知識なども活用しながら、様々な視点で思いを巡らせ、自分の中に新しい価値をつくりだす学習」(学習指導要領解説)であるので、作者の心情は、考えを深めるための知識の一つに過ぎない。ゴッホについてもっと知りたい生徒は、自分で調べるであろう。

「深く考える」授業は、見たものや聞いたもの、様々な情報に対して、自分の考え方や価値意識をもって向き合い、視点を変えながら深く吟味できるような授業である。未知のもの（作品など）に出会ったときの「私」の考えや見方、視点などが、授業の前後で変わったかどうか大切である。色や形に対する基礎的な力の使いながら、思考力を働かせて作品を深く味わい、自分の生き方にまで思いを巡らせることができ、それを生徒が実感できるような授業をこれからも目指したい。

7. 主な参考文献

- 「中学校学習指導要領解説 美術編」（平成20年9月 文部科学省）
- 「言語活動の充実に関する指導事例集【中学校版】」（平成23年5月 文部科学省）
- 「美術教育の題材開発」（三澤一実 監修 平成26年 武蔵野美術大学出版局）
- 「エグゼクティブは美術館に集う」（奥村高明 著 2015年 光村図書出版）
- 「印象派美術館」（島田紀夫 監修 2004年 小学館）
- 「美の方程式」（布施英利 著 2010年 講談社）